

トロイ戦争

倉 田 稔

目 次

はじめに

- 1 前史
- 2 トロイ戦争の真実
- 3 アレクサンドロス＝パリスの妻？
- 4 トロイ戦争勃発まで
- 5 シュリーマン
- 6 ホメロス『イーリアス』
- 7 その後
- 8 トロイエー叙事詩圏の種々の話
- 9 考察

結論

はじめに

かの有名なトロイ戦争について、実際の目的と動機はどうだったのかを述べる。トロイ戦争は、トロイのパリスに奪われた絶世の美女・スパルタの王妃ヘレネーを、ギリシャ方が奪い返すために行われたとされている。しかしそれが本当の目的であったのか。

1 前史

ギリシャ小史

- BC.3000 ころ エーゲ海で青銅器文化が始まる。
 BC.2000 ころ クレタ島にミノア文化がおこる。
 BC.1300 ころ トロイ戦争が起きる。
 BC.1200 ころ ミュケーナイ文化が減ぶ。
 BC.700-500 アルカイック時代。都市国家。
 BC.490 マラトンの戦いで、アテネはペルシャに勝つ。
 BC.431-401 ペロポネソス戦争、アテネ対スパルタ。ペロポネソス戦争で、スパルタがアテネに勝つも、ギリシャは衰える。
 BC.323 から アレクサンダー大王の支配。ギリシャはマケドニアに支配される。アレクサンダー大王が東方支配をする。ヘレニズム文化が誕生する。

ヘロドトス (HRODTC, Herodotos, BC. c.484-430 以後) は、小アジアのハリカリナッソスの名門リュクセスの子として生まれた。彼は党争に敗れてサモスに逃げた。帰国して、後にアテネにゆき、ペリクレスやソフォクレスと交際した。BC.443 年、南イタリアのトウオリオイ建設に参加し、BC.430 年後、死んだ。彼は、エジプト、フェニキア、黒海北部、バビロニア、キレネなどを歴訪した。従来の散文史家と違い、アジアとギリシャの対立・抗争という総合的視点をうちだし、その頂点としてペルシャ戦争を『歴史』9 巻に記し、歴史の父といわれた。

彼の『歴史』によれば、リュディアは、

ヘラクレス家 -----> カンドレウス (リュディア王)

∞

王妃

∞

メルムナス家 -----> ギュゲス -----> アルデュス ----->
 サデュアッテス -----> アリュアッテス -----> クロイツソス

という系図になる。クロイツソスはギリシャの大半を征服した最初の人である。クロイツソスは、アテネとスパルタと、同盟関係を結ぼうとした。アテネはペイシストラトスが支配していた。スパルタはかつてリュクルゴスが王だったが、その後は、アナクサンドリデスとアリストンが王になった。クロイツソスはスパルタと同盟した。彼はペルシャのカップドキアを攻めた。しかし反抗されて、ペルシャ（キュロス王）が、リュディアの都サルディスを占領し、クロイツソスを捕えた。

この系図のヘラクレスは、神話によればこうである。ゼウス神とダナエの子ペルセウスの孫アルクメネは、アムピトリュオンの貞淑な妻だった。ゼウス神が彼女を見そめて近づいた。ゼウスはその夫に姿をかえて変わった。生まれたのがヘラクレスだった。ゼウスが、生まれる子に支配権を与えると述べた。ゼウスの妻・ヘラ神はそれを嫉妬し、ヘラクレスが生まれるのを遅くし、エウリュステウスを先に生まれさせた。そこでヘラクレスは彼の支配に服することになった。ヘラクレスはそれに不満であり、そこでエウリュステウスは、10の苦行をすれば、自由にさせると言った。その通りにヘラクレスははじめ10の、その後12の苦行をした。それ以来ヘラクレスはギリシャの英雄の1人と称えられるのである。

ギリシャは、オリエントから文明の影響を受けた。ギリシャ人はエーゲ海の島々を利用して活躍し、オリーブと葡萄、大理石と壺が特産であった。初めミノア（クレタ島中心の）文明が起こり、クノッソス神殿と、そのミノス王が代表的であり、BC.1700-1400年ころが最盛期であった。

イギリス人考古学者アーサー・エヴァンス(1)が、クレタ島でミノス王のクノッソス宮殿を発見し、発掘した。クレタ島の現在の都市はイラクリオンで

ある。クレタ文明はミノア文明と名付けられた。クレタ島のユクタス山はゼウスが葬られた所とされる。エヴァンス以来、次々と発見がなされた。

ギリシャでは、クレタ人に代わってミケーネ人が登場する。それは BC.1500 年ころからであり、彼らは東地中海の主人になった。ミケーネ文化は BC.1600 から BC.1200 または BC.1100 年まで継続する。後にシュリーマンは、半分露出していたミケーネ文明を発掘した。

北方ギリシャ人の移住・浸入が原因で、ミケーネ時代＝文明が減じた。新しい支配者である彼らは、アイオリス人、イオニア人、ドーリア人であり、主にドーリア人である。彼らはその後、歴史に登場することはなくなった。その後ギリシャにポリスが成立した。その一つアテネは英雄テセウスが多くの村を集めて作ったポリスだという伝説がある。ポリスは、初めは王制で、前 8 世紀に貴族制になった。この時ここに市民共同体が発生し、前 7 世紀には法治体制が形成された。そして文化の面ではギリシャ文字が作られた。ギリシャではオリンポスの神々の信仰が定着し、オリンピック競技会が BC.776 年に初めて行なわれた。ギリシャ人は自らを、バルバロイ（野蛮人）に対するヘレネス（ギリシャ）と考えた。ギリシャ統一体が成立し、大植民活動が始まった。まず南イタリア、南仏海岸、北アフリカ海岸、ついで黒海地方へ植民し、こうしてギリシャ経済圏が出来た。ギリシャは、植民都市をギリシャ的に作り、しかし母国の従属地とはしなかった。

トロイ戦争の時代、BC.1300 年ころは、世界は次のようであった。四大文明が栄えていた。ギリシャにはポリス（都市国家）が誕生し、王制がしかれ、ミノア文明からミケーネ文明へ移っていた。つまりギリシャ本土を中心とする文明時代になっていた。大事件としては、1、モーゼが出エジプトを敢行した。2、セラ島（英語名サントリーニ島）で大爆発が起こった。この大事件をきっかけに、ミノア文明からミケーネ文明へ移ったのではないか。加えて、記録として、『旧約聖書』には、モーゼの時代に、トロイのプリアモス王がエジプトのファラオ（日本語聖書ではバロ）に、贈り物をしている件があ

る。

2 トロイ戦争の真実

『歴史』、エジプトの部で、ヘロドトスは、エジプトの祭司たちが彼に語った話を書く。トロイの王の息子であるアレクサンドロスは、スパルタからヘレネと財宝を奪い、母国へ向かったが、烈風に流され、エジプトへ漂着した。エジプト王メンピスのプロテウスは、パリス、ヘレネ、財宝、従者を召し、女と財宝を持ちさらぬこととした。

アレクサンドロスがトロイではなくエジプトへ漂流した話を、ホメロスは知っていた。叙事詩「キュプリア」はホメロスのものではない。ホメロスの「イリアス」では、アレクサンドロスはヘレネを連れて漂泊した、とする。

この祭司たちは、メネラオスから伝え聞いたとする話をヘロドトスにした。ヘレネを取り戻すべくギリシャの大軍がテウクロイ＝トロイへ攻め寄せた。上陸してからイリオンの城に使者を遣わし、当のメネラオスも同行した。一行は、ヘレネとアレクサンドロスが奪った財宝の返還と、賠償を要求した。しかしトロイ側の返答は、ヘレネも財宝もエジプトにあることを盾に、だから償えないと拒否した。しかしギリシャ人は、トロイア人に愚弄されていると思いこみ、攻撃をしたのだった。しかし城を占領してもヘレネを見つかることはできなかった。そこでギリシャ人は、やっとトロイ側のはじめの話を信じ、メネラオスをプロテウス（エジプト）の許へ遣わした。メネラオスはエジプトへゆき、ヘレネと財宝を返還してもらった。メネラオスは、その際、エジプトの子供2人をさらっていくという悪事をやった。

というわけで、この記述では、ヘレンはトロイにいなかった事を証するのである。それゆえ、ヘレン奪回がトロイ戦争の目的だったとは考えられない。戦争はトロイの財産を奪うのが目的だったのである。仮に初めは知らなかったとしても、10年もの間、トロイの地にヘレネがいないことを知らないでいたとは、考えにくい。お互いにスパイを送りあっていただろうし、メネラー

オスがエジプトに行っているのだから、それを考慮に入れるならば、そこには矛盾が浮上してくる。

3 アレクサンドロス＝パリスの妻？

ペーレウスとテティス（女神）——後にアキレウスを産む——が結婚した時、彼女はすべての神を招待したが、エリス（争いの女神）だけが招かれなかった。そこで彼女は怒って、「一番美しい女神へ」と書いた黄金のりんごを座に投げ込んだ。ヘーラー（ゼウスの正妻・神）、アプロディーテー（愛と美の女神）、アテーナー（知恵の神）が、それぞれそれは自分のものだと主張した。三女神が美を競ったのだった。ゼウス神は、トロイの王子パリス（＝アレクサンドロス）に審判させる。

ペーレウス ∞ テティス（神）

|

アキレウス

トロイの王はプリアモスで、パリスはその息子だった。彼が生まれた時、彼がこの国の滅亡の原因になるという予言があった。そこで父は彼をイーデー山に送って羊飼いとして成長させた。生まれた時の名はアレクサンドロスで、その後パリスと名乗る。

さてパリスが、誰が美しいかというこの難しい審判(2)を命じられて、3女神がそれぞれ約束を提示した。アプロディーテーに美の勝利を与えた褒美には、彼女は人間の中で一番美しい女性をパリスの妻にすると約束した。そこでパリスは黄金のりんごをアプロディーテーに与えた。だがそのため彼はヘーラーとアテーナーを敵に回すことになった。以上、神話である。

昔、フェニキア人がギリシャのアルゴスに商売でやってきた。彼らはその

イナコス王の娘イオを奪って、エジプトへ向かった。逆に、ギリシャ人（たぶんクレタ人）がフェニキアのチュロスへ侵入して、王の娘エウロペを奪った。またギリシャ人（たぶんクレタ人）は、コルキス（黒海東岸）から王女メディアを奪った。

トロイのプリアモス王の子アレクサンドロス（＝パリス）は、それらのかつての略奪事件を知り、自分もそうしようとした。アレクサンドロスはヘレネを奪い去った。神話によれば、スパルタ王の妻レダにゼウス神が惚れて、白鳥に身を変えて近づいた。生まれたのがヘレネである。アレクサンドロスは、女神たちの審判で、人間の中で一番美しい女性を与えるとされたから、ヘレネを与えられたのである。

ギリシャ側はまずトロイに使者を送り、ヘレネの返還を求め、略奪に対する賠償を請求することにした。しかしギリシャ側の申し出に対して、アレクサンドロス＝トロイ側ではメディア略奪の先例を盾にして、ギリシャ側が自分では保障も払わず、返還要求にも応じなかったにもかかわらず、他（＝トロイ）からは補償を得ようとしている、となじった。

ギリシャはアジア（＝トロイ）へ軍を進めたので、ここからはギリシャ人が悪いということになった。ペルシャ側の意見では、女の略奪は悪人の所業であるが、本気になって報復をしようとは、愚か者のすることである、と。ちなみに、トロイはペルシャの地にある。（『歴史』）しかしこの間、歴史が変わっていた。こうしてトロイ戦争が開始された。

4 トロイ戦争勃発まで

ホメロスの *Ilias* と *Odysseia* の以前・同時代には多くの叙事詩があった。それらをトロイエ叙事詩圏といい、作者、作品、巻数をあげると、次のものがあつた。

Statiuss または Hegesias, Kypria. 11 巻. Homeros, *Ilias*. 24 巻.

Arktinos, Aithipios. 5 巻. Leskes, *Ilias mikras*. 4 巻.

Arktinos, Iliou Persis. 2 巻. Homeros, Odysseia. 24 巻.

Eugamon, Telegoneia. 2 巻.

このうちホメロスの 2 つの作品だけが後世に伝えられた。残されなかったものには梗概がある（後述）。

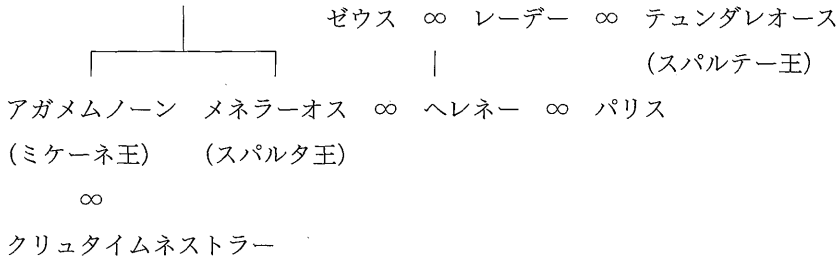
ホメロス (Homeros) は、小アジア、イオニア北部のキオス島スミュルナあたりの生まれで、イオニア文化の人である、BC. 8 世紀の人で、半ば伝説的人物であり、ギリシャ最大の詩人、吟遊詩人である。彼は盲目だった。その「イリアス」*ΙΛΙΑΣ*, *Ilias* (トロイ戦争物語)、「オデッセイア」*Οδυσσεΐα* (*Odysseia* (オデッセウスの帰国物語) は、彼が書いたかどうか分からない、歌ったものである。この 2 つの叙事詩の背後には既述のように長い叙事詩の伝統があった。

『イーリアス』は一万数千行に及ぶ英雄叙事詩である。BC. 12 世紀ころ事実としてあったと推定されるトロイ戦争を反映・記述している。この詩の完成は BC. 8 - 9 世紀ころらしい。口承文学としての伝承のうえに成立し、数百年にわたる幾多の吟唱詩人の手をへたものを材料として完成した。ホメロスは BC. 900 ころの人であり、個人でなく、集団に冠された名かもしれない。

他方、『オデュッセイア』*ΟΔΥΣΣΕΙΑ* は、英語ではユリシーズで、オデッセウスがトロイアからイタケーへ帰る物語である。これは、『イーリアス』からおそらく数十年後につくられた。

ギリシャ神話とホメロスの詩は、ヨーロッパ人の教養をなしている。ヨーロッパは、ギリシャの学問・思想・文化・政治を愛し、ギリシャ神話が受け継がれた。神話はどこでもある。日本でも、稗田阿礼による古事記がある。神話は権力にとって必要である。ギリシャの多くの物語では、ギリシャの貴族を神の後裔とみなし、血筋の良さと権力者との正当性を付与した。『イーリアス』でのギリシャの神々は人間的な性格をもっている。例えば、神々は、それぞれの軍、人物を最良にしている。彼らは、いつも自分に貢物・供え物を与える人々を守っている。ゼウスはたくらみを行なう。神は人・神と性愛を行ない、人間くさい。例えば、ゼウスは妃の化粧による魅力にまけてしまうという例もある。

(ミケーネ王) アトレウス



Kypria

スパルテー王ティンダレオース (Tyndareos) の后レーデー (Lede) と大神ゼウスとの間に生まれた(3)絶世の美女ヘレネーの婿選びの席に、全ギリシャの王・諸侯が集まった。ティンダレオースは、その中の一人を選べば争いが生じると怒る。オデュッセウス (イタケー) はこの時、集まった英雄たちに、婿選びの決定には従うこと、そしてヘレネー夫婦に事があった際にはすべて一致協力して助けることを約束させた上で、誰かを選択するようにすすめた。ティンダレオースは、席上の人々にその誓言をさせた上で、メネラーオス (ミケーネ王アトレウスの二男で、アガ멤ノーンの弟) を婿とする。

さてトロイのパリスはギリシャに渡り、スパルタ王メネラーオスに迎えられた。その妃がヘレネで、女性の中で一番美しい人だった。パリスはヘレネを口説き、メネラーオスの留守の間にヘレネと財宝を奪って立ち去り、トロイに連れて行った。そこでメネラーオス王はギリシャ中の王に使いをやった。結婚前に、大勢の求婚者はヘレネを危害から守ると約束していたからである。それで皆が、ヘレン奪回の戦争のために集まった。

イタケーのオデュッセウスは、ペーネロペーと結婚し、子どもでき、楽しい生活をしていたので、その気がなかった。メネラーオスの使者がくると、オデュッセウスは気違いを装った。使者は、彼の幼い息子テーレマコスと、父の前におくと、父は彼を脇にどけたので、その行為により、正気であると分かってしまった。オデュッセウスは、約束を断わる口実を失ってしまう。そして

人々を熱心に誘うようになった。彼は特にアキレウスに参戦するように誘った。

テティス（海のニュムペー）は、息子アキレウスが戦いに参加すると、死ぬと知っていた。そこで、スキュロスの王リュコメデスの宮廷に息子を送り、彼を乙女の姿に変装させた。オデュセウスはそれを聞き、商人に化けて行き、女性の装身具を姫たちに見せた、またそこに武器をまぜた。アキレウスは武器に手を出したので、見つかってしまい、オデュッセウスは彼を説得し、アキレウスは戦闘に参加することになった。

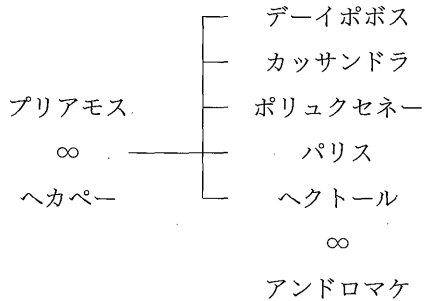
ギリシャではアガ멤noon（ミュケーナイ王）が総大将に選ばれた。ギリシャ方のアキレウスに次ぐ武將は、アイアース、ディオメデス、オデュッセウス、ネストールである。メネラーオスとその兄アガ멤noonは、先の約束によって、全ギリシャの王侯たちに援助を求め、2年間の準備で、アガ멤noonの指揮の下にトロイに遠征し、ヘレネーと財宝の返還を要求した。だがトロイ方はこれを容れず、（というよりも、彼女は居ないのだから、どうしようもない。）ここに10年にわたる攻防が始まるのだった。

アキレウスやオデュッセウスらのギリシャ各地の王が、大軍でトロイを攻め、ヒッサリクの丘の城を囲んで戦った。

トロイ方の武將の一人はアイネイアースであり、最強の武人は王子ヘクトールである。

ギリシャ軍は、船をトロイ市の前の湾内にひきあげ、そのそばに陣営を築いて根拠地とし、まずトロイ市の周囲の町まちをアキレウスの指揮の下に次々と攻め落とす。戦いは10年目に達した。10年目にトロヤが落城するのだった。BC.13世紀後半だった。(4)

トロイの王家は、こうである。



この Kypria の話は、常識となっているが、ヘレネーはトロイに行っていない。

4 シュリーマン

トロイ遺跡発掘に貢献したのは、シュリーマンである。彼は、1822 年、北ドイツの小村、ノイエ・ブコウ (Neue Buckow) の説教師の息子であった。父がホメロスの英雄の働きやトロヤ戦役の出来事を語り、8 才の時、「子供の世界史」を与えた。そこにトロヤ落城の挿絵を見て、トロヤ発掘を生涯の念願とした。少女ミンナ・マインケ (Minna Meincke) だけが彼に共鳴し、「将来の計画に賛成」した。(邦訳 13 ページ) 彼は、父の停職でギムナジウムをやめ、14 才でレアル・シューレを卒業し、小売店の小僧になった。病気で失職し、船の給仕になるが、すぐ難船した。彼はドイツに帰らず、アムステルダムへ行き、ある事務所に勤めた。独創的なやり方で、英語をマスターし、フランス語、オランダ語、スペイン語、イタリア語、ポルトガル語をもマスターする。しかし彼はこの事務所を首になり、別の商会へ移った。ついでロシア語を学んだ。シュリーマンは、1864 年にペテルブルグに代理人として派遣され、成功した。そこで音信不通であったミンナに結婚を申し込んだが、数日前に他の人と結婚したという返事を得て、落胆した。しかし 1847 年に大商人として登録された。クリミア戦争ではインド藍の取引で儲けた。ギリシャ

語をこれまで学ばなかったのは、この素晴らしい言語の魅力が余りに強くて商売をおろそかにするのを恐れたからだった。6 カ月で近代ギリシャ語、3 カ月で古代ギリシャ語、2 か年で古代ギリシャ文学を学んだ。「イーリアス」「オデュッセイア」を幾度も通読した。

彼は 1858 年、商売で資産が十分になったのを機会に、引退を考えた。世界旅行をし、また商売を再び行なうことになり、1863 年末に商売をやめ、再び世界旅行をした。1866 年にパリに住み、考古学を研究した。1868 年、イタカ (Itaka, イオニア海の) に乗り込み、発掘作業を開始した。しかしこの時は、英雄オデュッセウスの宮殿と信じた跡地から壺類を発見しただけで終わった。

しかし彼は 4 大発掘期の第 1 を始める。トロヤ発掘 (1871-1873) である。彼はヒッサリクの丘を掘ろうとした。掘る場所はホメロスの言葉から推論した。後期ギリシャ建築の壁に当たった。しかし目的はトロヤ遺跡だったので、とり壊して進んだ。地下 30 m を掘り尽くして、トロヤを発見した。アカイア門だった。財宝も発掘 (1874-1878) した。「鍬と鋤とによってホメロスの歌の舞台をあらわすことがシュリーマンの一生涯の目的であった。」(90 ページ)

シュリーマンの確信は、トロヤ戦争を歌ったホメロスの詩の真実性にあった。そしてホメロスの言葉に導かれて掘った。シュリーマンは、ホメロスの詩句が詩人の空想でないことを実証し、一方、トロヤ文明、ミケーネ文明を発見し、考古学を巨大に前進させた。個々の判断には誤りがあったが、彼の業績なしでは、今でもトロヤ、ミケーネ文明の考古学を通りすごせない。(5) シュリーマンの部分的発掘でこの戦争が事実であることが分かった。

普通の話は以上のようなのだが、最近の研究ではそうではない。トレイル『シュリーマン』(青木書店)によれば、こうである。

シュリーマンは、子供の時からギリシャに憧れ続けていたわけではなかった。初めからギリシャに興味があったのでもなかった。古典ギリシャ語をわざとやらずに最後に学んだ、のではなかった。商売に必要なので、ギリシャ

語をすでに学んでいた。そうすると、彼の書にある語学のマスターのコツ論も、疑問となる。

彼は商売で旅行をし、旅行が大変な興味となった。旅行者としての興味の一つがギリシャとなった。彼は、考古学の研究でパリに行ったと言う。だが、パリの大学で聴講はしたが、それは「一般文化」であり、それも途中でやめたのだった。しかし素人考古学者となった。学会の論争を部分的に聞きかじった。トロイがヒッサリクの丘にあるとは、当時の学会では考えていず、少数派の見解であった。素人のシュリーマンは、深く学問に関わらなかったことが幸いした。当時はブナルバシがトロイだと考えられていた。シュリーマンもそのつもりだった。だが、トルコ地方の地主でイギリス人考古学者のカルヴァートが、ヒッサリク説であって、予備調査をしていた。彼は、発掘事業をしてくれる人を求めている。そしてシュリーマンを誘導した。

一方、シュリーマンは、ロシア人の妻と離婚するため、アメリカ市民権を偽って取得した。アメリカでは離婚しやすかったからだった。その後、彼は学位をとった。彼は日記でも事実を書かなかった。彼はギリシャ女性と再婚したが、ギリシャ女性は貞淑だったからである。彼はルナン(『イエス』伝の著者)と友達になった。

トロイ発掘は金のためだったという説がある、しかし古代を知りたいという意欲、そして有名になろうという功名心からでもあった。発掘品も正確に記述されたのではなく、中には購入した物も混在している。出土器の年代の確定も適当=いい加減であった。彼は、時代測定の決定的要素である、出土した地層を考慮に入れなかった。その後、人に指摘されて、調査発掘の途中からだが、出土品の地層を記録するようになった。

彼はアテネに居をおいた。ギリシャでは、国外に持ち出そうとしなければ、発掘品が発掘者自身の所有物になるという法律であったからである。多くの人夫を現地採用し、発掘作業団に専門家を欠いていたから、遺跡を壊したこともあった。出土品を、ホメロス神話に合わせて解釈した。虚偽の叙述も書いた。ミケーネの発掘場所は、すでに巨大な城塞の廃墟として、地表に半分

現れていた。彼は商売では精を出したし、素人ではあるが、遺跡発掘の分野では、考古学的発見の質では世界一だった。

他の話はこうである。シュリーマンは、ロシアへの武器の販売、カリフォルニアの金の仲買人として、金儲けをした。それを資金にして、1868年にトロイ発掘に向かった。彼はアマチュア考古学者カルヴァートから考古学上の知識を得た。彼はヒッサリクの丘を掘ったが、乱暴な発掘であった。1873年に箱を見つけ、これを家に持ち帰った。トルコ政府は、発見物の国外への持ち出しを禁じていたが、それを破って、アテネの自宅へ持って行った。それを妻にかぶせたり、所有していることを秘密にしていた。だが、これはトロイより古い時代の物だった。つまり BC.3000 年ころの文明を見つけたのだった。この丘には 9 層の都市があった。トロイは 6 層と 7 層とに埋没していた。シュリーマンはついにカルヴァートの名を出さなかった。

ついで、彼はミケーネの発掘に向かい、1876 年に開始した。そこでは、墓地、財宝、黄金のマスクを発見した。シュリーマンはこれをアガメムノーンのマスクだと見なしたが、後に否定され、アガメムノーンの時代よりも 300 年ほど前の物だった。シュリーマンは結局、アガメムノーン時代の物を発掘できなかった。

シュリーマンの死後、1932 年にブレーゲンがトロイの門を発見し、加えて 2 つの遺跡を発見した。一つは平和な町、一つは窮乏した町であり、トロイ戦争時代にはすべての人が町に入っていた。ブレーゲンは、発掘中に巨大な壺を発見した。ブレーゲンの調査した段階・時点では、トロイは大きな城塞ではなかった。その後再発掘されて分かったのだが、町の外側に大きな防壁があった。すなわち町は二重になっていた。ブレーゲンはトロイが焼けたと推測したが、1990 年に、トロイは軍隊によって破壊されたと結論づけられた。

トロイの財宝は、ドイツが奪って、ベルリン博物館に収納された。その後、第二次大戦で、ソ連が略奪して、モスクワのプーシキン博物館に収蔵された。ロシアは 1993 年にその所在を認め、1996 年から一般公開された。

6 ホメロス『イーリアス』

ホメロス『イーリアス』は、10年間続いたトロイ戦争のうち、落城の時期を除いた最後の1年を叙す詩である。

第1巻 〈疾病と憤怒のものがたり〉

ギリシャ（アルゴス勢）軍がテーベを攻め落とし、戦利品としてアガ멤noonへは乙女クリューセイスを与えた。ところがアポローンの神官を勤める娘の父が、沢山の身の代をもって娘を購いたいと、やってきた。

アガ멤noonだけは、これに大層機嫌を悪くし、神官に侮辱を加えて追い返した。老人はやむなく帰り、アポローンに祈ると、アポローンはそれを聞いて、アルゴス勢に向かって過いの矢（あるいは疾病）をどんどん放ったので、兵士達は次から次へと死んでいった。占い師が矢の神託を説き明かしたので、アキレウスが神意を宥めるようアガ멤noonに薦めたが、彼は腹を立ててアキレウスを脅しつけた。アキレウスは、災いは彼女を返さなかったからだと言ひ、アガ멤noonは娘クリューセイスを送り返すことに同意し、手放す。その代わりアキレウスに与えられた乙女ブリーセイスをよこせと言ひ、連れていってしまう。アキレウスは従うが、怒ってギリシャへ帰ると言う。(5)

パリスが美しさを軽んじたので、ヘーラー神とアテーナー神はトロヤに敵意をもち、それにポセイドーン神も加担した。アプロディーテー女神はトロヤに好意をもち、アレース（軍神）もであった。

アキレウスの母・海の神テティスは、息子のいさかいを知り怒り、ゼウスに懇願し、息子の恥辱をそそぐよう、次の会戦でトロヤを勝たせよと頼む。

(7)

第2巻 〈ボイオーティア、または船軍のカタログ〉 {ギリシャ軍はイカリア海沿岸にいまする。そして9年間戦っている。}

ゼウス神は計り事をたて、アガメムノーンにトロヤ攻撃をすすめる。ギリシャ側は再びトロヤ攻撃の陣を立てた。ギリシャ側の船はミケーネ勢を除いても1000隻以上であった。そのうち怒ったアキレウスの勢は参加しなかった。トロイア勢と同盟軍はプリアモス王の宮殿のすぐ前のつき立った円丘で勢揃いした。

第3巻 〈誓約、城壁からの検分、パリスとメネラーオスとの一騎打ち〉

トロイア方の先陣として現れたのはパリスで、彼はメネラーオス(ヘレネーの前夫)が現れたので、肝をつぶして逃げる。それをヘクトール(パリスの兄)が叱る。パリスはそこで自分とメネラーオスとの果し合いを提案し、勝利した方が財宝全部とヘレネーをとることにした。

プリアモス王とアガメムノーンが誓約をし、一騎打ちが始まる。パリスが青銅の槍を投げ、楯に当たってささる、次にメネラーオスが投げると、楯を破って肌着まで切り裂く。そして剣で兜をうつと剣が粉々になる。そこで彼は、パリスに躍りかかり引きづってくるが、兜だけであった。そこで槍をもって躍りかかったが、女神アプロディーテーがパリスをさらって奥の間につれてゆく。パリスとヘレネーは聞へゆく。(史実からすると、ヘレネーはここにはないので、聞にゆくわけがない。)

第4巻 〈誓約の破棄、アガメムノーンの部隊査問〉

神は、トロイア軍からまず先に誓いを破って、ギリシャ勢に害を加えるよう企てた。パンダロスはメネラーオスに矢を射て、彼は負傷する。事実上メネラーオスが一騎打ちで勝ったのに、その誓約を破られたので、アガメムノーンはギリシャ軍を叱太激励し、軍勢の間を廻り、攻撃をする。両方の戦闘が始まる。

第5巻 〈(ギリシャ軍の) ディオメーデースの武勇譚〉

第6巻 〈ヘクトールとアンドロマケーの出会い〉

ヘクトールはパリスを参戦させにゆく。またヘクトールは、トロイア勢が苦戦と聞いて、城壁に向かった妻アンドロマケーに会いにゆく。彼らは途中で出会って、語り合う。(8)

第7巻 〈ヘクトールとアイアースの一騎打ち、死者のとりかたづけの段〉

アポローンとアテーナーが計画し、ヘクトールとギリシャ軍一番の勇士とを一騎打ちさせようとする。ヘクトールが呼びかける。メネラーオスは立ち上がるが諫められ、アガ멤ノン以下9人が立ち上がる。そこで籤をふり、アイアースに決まる。ヘクトールは槍を投げる。アイアースも投げる。手槍の戦い、石塊の戦いになり、引き分ける。

ギリシャ軍は、戦死者の火葬のため一時休戦を考える。トロイ側では、一案としてヘレネーとギリシャからもってきた財宝をギリシャに返そうとする。これに対しパリスは拒否する。妻は返さない、しかし財宝は余計につけて返すと。プリアモス王は、ギリシャ方へ使者を送り、パリスの案と、死者の屍を焼き終えるまで停戦することを告げる。ギリシャ軍はパリス案を拒否するが、停戦を受諾する。翌日両軍は戦死者を火葬にする。ギリシャ側は墳をつくる。(ここでもフィクションが入ったわけである。)

第8巻 〈戦い腰砕けの段〉

トロイア側が攻勢に立つ。ゼウスの加護と、とりわけヘクトールの奮戦によって、ギリシャ側は纂を乱した。

第9巻 〈アキレウスへの使者派遣祈願の段〉

敗戦にアガ멤ノンには気落ちして、帰国を提案する。ディオメーデースはそれを諫め、長老ネストールはアキレウスをひき戻す案を提言する。アガ멤ノンは以前の過ちを認め、財、プリーセーイスを含めた女、馬、1人

の自分の娘、城を贈って、加わるよう、使者をむける。しかしアキレウスは激しく断わる。

第10巻 〈ドローンの段〉

ギリシャ方は間諜を放つことにした。まずディオメデースが指名され、彼はオデュッセウスを仲間を選ぶ。トロイア方も会議を開き、間諜を送ることにした。名乗りを上げたのはドローンだった。偵察にきたドローンを、ディオメデースとオデュッセウスは見つけて、わざとやりすごし、後を追う。捕まったドローンはトロイア情勢をすべて喋ってしまい、直後、首を切られる。ディオメデースは、トロイア陣に入り込み、トラキア勢13人を殺し、その間、オデュッセウスは馬を奪ってしまう。

第11巻 〈アガメムノーンの武勇譚〉

ギリシャ方は敵の堅陣を破る。その中でアガメムノーンが奮戦し、多くの敵を倒す。ゼウス神はヘクトールに忠告を与える。アガメムノーンが荒れ狂う間はヘクトールは引き退り、他の武士に激しい合戦をすすめる。アガメムノーンが退いた時、ヘクトールに武力を授けると。アガメムノーンは負傷し退く。ヘクトールを中心にトロイア方が反撃する。ディオメデースは槍を投げ、ヘクトールにあたるも、死に至らせず。パリスの矢はディオメデースの足の甲を突き抜ける。オデュッセウス1人、負傷しつつも奮戦する。メネラーオス、アイアースが救いにゆく。アキレウスは心配し、親友パトロクロスに戦況をきかせに遣わす。

第12巻 〈船陣の囲壁での戦い〉

ギリシャ方の作った塹壕の上に囲壁があり、トロイ方は5部隊で攻める。リュキア方（トロヤ）のサルペードーンがメネステウス陣を攻める。大アイアースとテウクロス（弓の名手）が助けにくる。ヘクトールは大石で門をこわし、トロイア軍は囲壁の中に入る。

第13巻 〈船わきの戦い〉

大地の神ポセイドーオンは、ギリシャ（アカイア）勢を激励する。激戦となる。

第14巻 〈ゼウス瞞着の段〉

トロイアの攻勢に、老将ネストールは戦術を決めるためにアガ멤ノーンを訪れる。アガ멤ノーンは後退すなわち船を沖へ出す策を述べ、ディオメデースはこれに反対し、攻撃を進言する。トロヤ方に肩入れしているゼウス神に、その妃ヘーレー女神は一計を案じた。化粧をしゼウスの心をかきたて、床に入り、眠らせた。その間、大地の神ポセイドーオンはギリシャ方を再武装させ、再び合戦がはじまる。アイアースの投げた大石でヘクトールが負傷する。

第15巻 〈船辺からの撃退〉

トロイア方は崩れる。ゼウス神は目を覚まし、ヘーレー女神を叱る。虹の女神イーリスと射手のアポローン神を呼ぶ。イーリスは、ポセイドーオンに戦いから手を引けというゼウスの言を伝える。アポローンはヘクトールの所へゆき、アカイア・ギリシャ軍を敗走させよと力づける。ヘクトールを先頭にギリシャ方を敗走させる。船辺まで攻め立てる。

第16巻 これを見ていたパトロクロスは嘆き悲しむ。そしてアキレウスに、その武具を自分に貸して出陣させよと頼む。アキレウスは、船陣から敵を追い払ったら引き返せといて、親友パトロクロスに甲ちゅうを与える。その間ギリシャ方の船に火の手が上がる。パトロクロスがアキレウスの部下ミュルミドーン族の5隊を率いて出陣し、トロヤへ反撃し奮戦し、ヘクトール以下が退却する。リュキア（トロヤの同盟軍）の大將サルペードーンもパトロクロスに討たれる。パトロクロスは勝ちに乗じてアキレウスのいいつけを守らず、イーリオスの城まで、トロヤ、リュキア勢を追ってゆく。ヘクトール

はパトロクロス1人をめがけて迫る。アポローン神はパトロクロスの武具をはずしてしまう。一騎討ちとなり、パトロクロスは負傷したのち、ヘクトールによって討たれ戦死する。

第17巻 〈メネラーオス勇戦の段〉

パトロクロスの着ていたアキレウスの甲冑を、ヘクトールは身につける。パトロクロスの屍を奪うための戦いが続けられる。ギリシャ方は負けながらもパトロクロスの屍を持ち去る。

第18巻 〈物の具作りの段〉

ネストールの子アンティロコスがアキレウスに、パトロクロスの戦死を伝えた。親友の死にアキレウスが嘆き悲しんでいると、それを聞いた母テティス神が来て理由を聞き、アキレウスが出陣するというので、(鍛冶の)ヘーパイストス神に甲冑を作って貰おうとして赴く。女神ヘーレーはアキレウスを励ます。トロヤ方はヘクトールを先頭に、船陣まで押し寄せ、パトロクロスの屍をめぐる双方が奪い合う。アキレウスは、甲ちゅうなしで戦列には加わずに登場すると、トロイア方は恐れて混乱する。パトロクロスの屍は取り戻す。トロヤ方は会議をし、ふみととどまるべきというヘクトールと、城まで退けというプリュウダーマースの意見が対立し、ヘクトール案が賛成される。テティス神はヘーパイストス神を訪れ、息子アキレウスのために、楯、甲冑を作ってくれるよう頼む。ヘーパイストスは、大形で頑丈な楯、胸甲、すね当てを作る。

第19巻 〈立腹やめの段〉

テティス女神はヘーパイストス神の作った物の具をアキレウスのもとに持って来る。アキレウスは船団のもとでギリシャ方の会議をアガ멤noonらと開く。アキレウスは自分の墳りを捨てると宣言する。アガ멤noonはかつての約束の贈物一切を与えると。ギリシャ軍は戦闘の前に食事をして準

備する。アキレウスはパトロクロスの死を嘆き、食事もしない。そしてかの物の具を身につける。

第20巻 〈諸神合戦の段〉

ゼウス神はすべての神を会議に集めた。トロイア方でもギリシャ方でも銘々が好きな方を加勢せよと。トロイアの指揮官アイネイアースが、アキレウスと戦おうと出てくる。投げ槍の応酬の後、ポセイドーン（神）がアイネイアースを持ち去る。アキレウスは4人の士（指揮官、戦士2人、プリアモスの子）を討つ。弟の死を見てヘクトールは、アキレウスと対峙する。だが、アポローン（神）がヘクトールをさらってゆく。アキレウスは荒れ狂ったように多数の兵士を討つ。

第21巻 〈河畔の闘いの段〉

アキレウスはトロイエ方を攻め、彼らはクサントス[別名スカマンドロス]河までくる。アキレウスは敵を二つに断ち、一方を城方へ追う、他方はクサントス河に落ち、それを剣で切りまくる。プリアモス王の息子リュカーオンも殺す。クサントス河神はアキレウスを波で攻める。しかしヘーパイストス（神）の火気で防ぐ。神々は争う。アキレウスが城門まで迫る。トロイア方は城門の中に逃げ込む。

第22巻 〈ヘクトール討ち死にの段〉

ヘクトールだけスカイア門の前でアキレウスを待つ。プリアモス王と王妃は囲壁の中に入るよう説くが、ヘクトールは聴かない。アキレウスらが来ると、しかし恐ろしくなってヘクトールは、プリアモス城（イーリオス）の周りをぐるぐる逃げ回る。神々は兩人に一騎討ちをさせようとする。投げ槍がはずれる。ヘクトールは剣を抜き、アキレウスは槍で突くとヘクトールの喉を貫き、ヘクトールは死ぬ。ギリシャ勢がきて、ヘクトールの亡骸から鎧をとり去り、その体を武器で刺す。アキレウスは、ヘクトールの死体を戦車の

後ろにつなげ、引きずる。プリアモス王以下、トロイアの町の人々と妻・アンドロマケーは、その死を嘆く。

第23巻 〈パトロクロスの葬送および競技〉

ギリシャ軍はパトロクロスの葬儀を行なう。また吊いの競技すなわち戦車の競走、拳闘、相撲、徒競走、決闘(途中で分けさせる)、鉄塊投げ、弓、投げ槍を行なう。

第24巻 〈ヘクトールの屍を貰い受けの段〉

アキレウスは、パトロクロスの塚の廻りを、ヘクトールの屍を戦車につけて毎日回る。神々は不憫に思い屍を奪おうとするが、ゼウスはそれはできないとし、一計を案じる。ティティス神を呼びつけ、アキレウスに屍を返させるよう説く。アキレウスは承諾する。ゼウスは虹の神イーリスをプリアモス王に送り、ヘクトールの屍を贈物で貰い受けにゆくよう勧める。父王が死体をひきとりに馬車でゆく。王はアキレウスと会い食事をする。ヘクトールの吊いのため11日間の休戦の約束をする。プリアモス王は休むが、ヘルメース神が注意したのですぐ帰宅する。トロヤでヘクトールの屍が迎えられる。妻、母、ヘレネー(居ないはず)は嘆く。ヘクトールが火葬される。

「イーリアス」はここまでである。トロイ落城の件についてはまだ語られていない。

7 その後

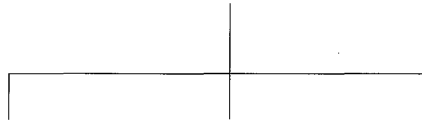
アキレウスはプリアモス王の娘ポリュクセネーを見て、妻にしたいと思い、その縁談の最中、パリスが毒矢を放った。それがかかとに当たり、死ぬ。そこは、アキレウスの母が、全身を不死身にしようと冥界のステュクス河に浸したが、彼女が掴んでいたかかとだけが水につからなかった所であった。

オデュッセウスの提案でギリシャ側は木馬を作った。そこにギリシャ勢を潜ませた。木馬を残してギリシャ軍は帰国するふりをした。トロヤ側は木馬を城内にに入れる。夜、武将たちが木馬から出て城門を開け、町に火をかけた。ギリシャ軍はその間ひそかに帰ってきていた。トロイはこうして敗北する。プリアモス王は殺される。妃ヘカペー、娘カッサンドラは、捕らわれる。娘ポリュクセネーはいけにえになる。ヘレネーはメネラーオスのもとに戻り、スパルタに帰る。(ヘレネーはエジプトにいるのだけれども。)

アガメムノーンは、故国に戻り、妃クリュタイムネストラーとその情夫アイギストスに謀られて、帰還祝いの時に殺された。その息子オレステースをも彼らは殺すつもりだった。姉のエレクトラーが弟をひそかに逃した。叔父ストロピオス＝ポーキスの王の所へと。オレステースは成長し、仇を討とうとする。彼は使者を装い、故国へ戻り、オレステースの骨だと偽って持ってきて、彼が死んだと言う。彼は姉に会って素性を明かし、母と情人を殺す。(9)ただしこの話では、クリュタイムネストレーは悪妻だとされるが、現在では、必ずしもそうだとは限らない。

『オデュッセイア』で、ネストールは語る。「アガメムノーンとネストールとメネラーオスはトロイエーからスーニオンまできた。メネラーオスはその後、分けられて、エジプトへ漂流した。一方、アイギストスはアルゴスの奥でアガメムノーンの後を言葉たくみに誘惑していた。クリュタイムネストレーはわきまえのある女なので、初めのうち、このけしからぬことを拒んでいた。アガメムノーンの出陣する時、妻を守る歌人がついていて、だが后を承諾させた時、アイギストスは歌人を無人島に捨て、猛禽の餌食とし、后をわが家につれて行った。アイギストスは、帰ったアガメムノーンを殺害し、黄金に富むミュケーナイを七年間支配し、人民は抑えられていた。8年目にオレステースがアテーナイから帰り、アイギストスを討った。母親とアイギストスの斉の日、メネラーオスが莫大な財宝を積んで帰ってきた。」

アガメムノーシ ∞ クリュタイムネストラー



イフェゲーニア? エレクトラー オレステース

また『オデュッセイア』では、オデュッセウスが帰国する前、その息子テレマコス、メネラーオスにもてなされたことがある。その時、妻ヘレネーはオデュッセウスの話をした。：「オデュッセウスは奴隷の姿でトロイエーの町に入り、物乞いに身をやつした。」彼はヘレネーだけは見分け、彼女はギリシャ方の策をきく。彼はトロイエ人を大勢討って、情報をギリシャ軍にもたらし、と。

(ヘレネーはこの時、ここにいただろうが、トロイエーの町のオデュッセウスの見分けは、居ないからできない。)

8 トロイエ叙事詩圏の種々の話

トロイエ叙事詩圏の種々の話はこうである。

Aithiopsis

ヘクトールの死後、トロイエーに来援したアマゾーンの女王ペンテシレイアがアキレウスに討たれる。曙の女神エーオースの子メムノーシがエティオピアの軍勢を率いて援けに来て、ネストールの子アンティロコスを討ちとるが、アキレウスの手にかかって倒れる。アキレウス自身もアポローン神に助けられたパリスの矢に倒れる。その母で海の女神ティティス、海のニンフとムーサたちと共に現れ、嘆き、わが子の武具をギリシャ最大の勇士に提供すると言う。オデュッセウスとアイアース（テラモーンの子）がこれを争う。

Ilias mikla

アキレウスの武具はオデュッセウスに与えられ、アイアースは怒り狂気になり自殺する。オデュッセウスは、トロイエーの王子ヘレノスを捕まえ、その予言によって、ギリシャ軍がレームノス島におき去りにしたピロクテーノスを迎える。さらにアキレウスの子ネオプトレモスを呼び寄せる。

ピロクテーノスはパリスを討ちとり、ヘレネーはパリスの兄弟デーイポボスの妻になる。オデュッセウスはスパイとして乞食に身をやつしてトロイエー城内に潜入し、ヘレネーに見破られるが、その助けによってトロイエー攻略の計り事をたて、城外に無事逃れる。(ここでもヘレネーは、パリスの弟と結婚させられている、など、フィクションである。)ついでディオメーデースと共にトロイエーの神像パラディオンを盗み出し、大きな木馬の中に勇士たちを武装して隠し、ギリシャ軍は自分の陣営を焼き払って、テネドス島に退く。トロイエー人は敵去ったと思い、城壁を崩し、木馬を引き入れる。夜中、勇士らは外におどり出、ギリシャ軍は帰って来、縦横に荒れ狂い、プリアモス王をはじめ男たちを殺し、女たちは奴隷とし、町を焼き払い、トロイエーは陥落する。

Iliou Persis トロイエの陥落の話。

Nostoi

トロイエ陥落後のギリシャ諸侯の帰国物語。ネストール、ディオメーデース、イードメネウスは、無事帰国する。オイレーウスの子アイアースは帰途難船して死ぬ。アガメムノーンはミュケーナイに帰ったが、后クリュタイムネストレーとその情夫アイギストスとに殺される。メネラーオスはヘレネーと共に帰るが、嵐でエジプトへ流される。8年の放浪の後に莫大な財宝を得て帰国する。ネオプトレモスは祖母の女神テティスの教えで陸路国に帰る。

トロイの後の話は、エウリピデスの「トロヤの女」によると、こうである。

ギリシャはトロイの財宝を奪おうと機をうかがっていた。彼らはヘレンを口実にした。戦争後、ギリシャ方は、金銀、武器、鎧などを奪った。トロイの王は妃の前で殺された。男性は殺され、女性は捕われ、簪で、ギリシャの諸貴族の所有物になった。逃れた者は隊長らの物になった。

王妃ヘカベ ——> オデュッセウスのもとへ、その夫人に仕える。

王女カッサンドラ ——> アガ멤noonへ女として、しかし狂う。

王女ポリクセネ ——> アキレウスの墓守になり、しかし死ぬ。

ヘクトールの妻アンドロマケは、アキレウスの息子のもとに、女として与えられる。子供が、ヘクトールの子なので、殺されると決まる。彼は母から引き離され、崖から落とされた。

トロイの女性はいずれも連れて行かれ、奴隷になる。

メネラーオスはヘレネに会う。メネラーオスがヘレネの運命を決めた。ヘレネは、パリスが来た時、彼に身を与えよと女神アフロディーテーの命令だったと言う。それにメネラーオスもクレタ島へ行っていて、留守だった。パリスは美しかった。パリスの死後、ヘレンは、パリスの弟デイボポスの妻になる。トロイの宝に目がくらんだのではないか。特にパリスの死後、逃げるなり、自殺するなり、チャンスはあったのではないか。メネラーオスは、ヘレネを連れて行くことにする。(この話は、表現が、劇という性質上、自由に空想されている。)

神話によれば、トロイアのプリアモス王の娘カッサンドラを、アポロン(学芸、太陽、の神)が見初めて抱こうとした。その代わり予言の能力を彼女に与えることにした。しかしその力を与えられてから、カッサンドラは逃げた。アポロンはその予言力を取り返せない。そこで彼女の予言を誰も信じないようにした。カッサンドラは、トロイの木馬の危険を知ったし、それを伝えた。だが信じてもらえなかった。戦争敗北後、カッサンドラはギリシャ兵に犯され、囚人となり、ギリシャへ送られ、その後殺された。それも彼女は予見していた。

トロイのアンドロマケーは、トロイ戦争敗北後、捕われの身になった。息子アスチュアナクスがいた。アキレウスの息子ピュロスが、トロイの城内で彼を城壁から突き落とした。ピュロスが彼女アンドロマケーを引き取った。そして彼女に求愛した。

Telegoneia

オデッセウスが、カリュプソーとの間にもうけた子のテーレゴノスに知らずして殺される。

以上の叙事詩圏は、Proklos (新プラトン学派の人, AD. 5 世紀) の、また Chrestomatheia Grammatike (文学便覧) からの Photios (9 世紀) の抜粋から知ることができる。

9 考察

14 世紀にサントリーニ島の大爆発が起きた。島の上部に 40 m の火山灰が積もった。大津波が地中海を覆った。BC.14 世紀に巨石文明が終わった。カルナック列石群 (フランス)、イギリスのストーン・サークルであり、これらは地中海技術による建築群である。これが終焉したのであった。クレタ (島) のクノッソス (宮殿) も、サントリーニ爆発で埋もれた。地震、火災、大津波で、ミノア文明が壊れた。トロイもその噴火により埋もれた。

トロイア戦争当時のミュケナイなどのギリシャ諸都市は、かなり発達した初期奴隷制的献納王制¹⁰⁾だったらしい。民衆抑圧の暴力装置を欠く軍事的民主制であり、戦争による奴隷獲得などの刺激で、徐々に階級が形成されてゆく過程にあった。なおホメロスは、それぞれ異なった時代ではあるが、この時代と自分の時代とを、いわば化合して反映したと見られる。

トロイ戦争よりも 300 年前、ミケーネがトロイと戦ったという例がある。

ホメロスの詩では、女性は人間の意志を持たない。男性の附属物として描

かれる。例えば、ヘレネーがそうである。戦争の結果、敗戦国民は奴隷となる。とりわけ女性である。その結果は、アンドロマケーの嘆きの言葉によって描かれる。(『イーリアス』第24巻の例)

ホメーロスの中にでてくる唯一の庶民(または平民)の典型は、テルシーテースであり、合戦の会議で彼は発言する。「アトレウスの子[=アガ멤ノン]よ、何をまた苦情をいって欲しがっているのか、あなたの陣屋はみな青銅でいっぱいになり、陣屋の中にいる女たちは大勢で、しかも選り抜きぞろいだ……それとも、まだその上に黄金がほしいというのか……さあ故郷へ船をみなもっていってしまおう……」。これは厭戦気分を代表している。だがテルシーテースはギリシャ軍中最も醜い男として描かれている。そして杖で打たれる。

ギリシャ方は1千の船でトロイへ向かった。トロイは巨大な城塞があった。戦争はBC.1300年頃であった。この頃は文字がほとんど使われていない。

メネラーオス=スパルタ側とトロイ側が貿易関係で競争していた。トロイ側では、パリスとヘレンは相思相愛になり、彼女はそれゆえパリスに従い、トロイに向かったとし、一方、スパルタでは、ヘレンは奪われたとし、トロイ側がヘレンの返還に応じなかった、とする。

トロイは、「黄金や青銅であふれた都」と形容された。トロイは豊かな国で、当時エーゲ海貿易の中心だった。ミケーネのアガ멤ノンは、トロイの豊かな富を奪うチャンスと見た。ミケーネは丘の上にあり、貿易都市だった。アガ멤ノンは戦争の始まる前、時分の娘を神々への生け贄とした。トロイまでは船で5日ほどかかった。

初め、アキレウスは戦いを拒否した。アガ멤ノンは正面攻撃をした。しかしパリスが一騎打ちを申し出、妻を奪われたメネラーオスがそれを迎え撃つ形で始まった。形勢不利になったパリスは逃げた。ヒッタイトの記録ではアレクサンドロス(=パリス)が戦ったとある。

闘いのハイライトは、アキレスとヘクトルの一騎打ちであった。ヒッタイトの記録では一騎打ちがあった、とある。近くにアキレスの墓があるが、そ

ここからは関係する出土品は何も出なかった。パリスが戦死したら、ヘレネはトロイにいた必要がなくなった。だが王はプライドから、ヘレネを返さないこととした、とされる。

トルコの北西部は地震の多発地帯である。木馬か地震かによって、トロイは倒れた。城塞を作ったとされるポセイドン神の象徴は、ちなみに馬と地震であった。

敗北したトロイに、メネラーオスが、ヘレンを殺そうとして探した。しかし美しい彼女を、殺さずにつれ返すことにした、とされる。

トロイ側の、戦争中に誘拐された女性たちが沢山いた。男たちは殺された。

トロイの場所は、第1次大戦ではガリポリの戦い、かつてはオスマン・トルコの戦い、アレクサンダー大王の戦いの、場となった。そこはダーダネルス海峡の入り口にあり、交通の要所で、貿易の拠点として、船から税金を徴収し、莫大な富を築いた。トロイはミケーネと共に、エーゲ海の二大貿易国家であった。商人や使節がトロイにやってきた。トロイは通行税をとった。トロイ戦争は貿易をめぐる闘いが原因かもしれない。

以上が、トロイの戦争と滅亡についての普通の解釈である。

これらは常識になっているが、事実を知れば、ずいぶん飛躍しており、ヘレンの奪回は戦争の理由にはならない。

結論

戦争の直接原因となったヘレネの所在についての、ホメロスの理解を、ヘロドトスはこう解釈している。ホメロスは、ヘレネがトロイにいないことを知っていた、と。

ホメロスは、より劇的な効果を狙ったのであった。居なかったならば、誰が考えても、話はつまらなくなり、非芸術的になる。そこでヘレネが居ることとしたのであった。

こういうわけで、トロイ戦争はヘレネを口実とした略奪戦争だった。

ホメロスの有名なトロイ戦争の物語は、その半分が神話である。その上、神話以外の本質的な叙述も、芸術的フィクションであることが明白である。

- (1) 彼はプラカを歩いていた。そこの骨董品店で石ころを見つけた。そしてクレタ島のイラクリオンへ行く。
- (2) ルーベンス「パリスの審判」(ドレスデン美術館)、他2種、がある。ボッティチェリ「春(プリマヴェーラ)」(ウフィツィ美術館)は、これに関わる。ルノワール「パリスの審判」(ひろしま美術館)。クラナツハ(父)が3種類、マニユエル、バーレン、ウテヴァール、ボス、ロラン、ヴェルフ、ワトー、シャルリエ、ワッツ、など、きわめて多く絵画となった神話である。岩田泰氏より。
- (3) それは神話なので、実際はレーダーとチュンドレオースの子であろう。
- (4) 映画「トロイ」、原題は「ヘレン・オブ・トロイ」、ユニヴァーサル映画で作られた。1956年にも映画「トロイのヘレン」が作られた。
- (5) Heinrich Schliemann (1822-1890), Selbstbiographie bis seinem Tode vervollstaendigt. 1891 1. Aufl. 邦訳 シュリーマン『古代への情熱』岩波文庫。
- (6) アガ멤ノーンの専横は、「氏族社会の原始的民主制の崩壊、階級社会への移行」を指し示している。『世界の文学』1, 新日本出版社 1972年, 31ページ。アキレウスは王に対し、庶民は諸侯に対して、反抗ができない。
- (7) 「ゼウスに懇願するテティス」(アングルエクス・アン・プロヴァンス美術館)
- (8) アンドロマケーのその後の物語はラシーヌ『アンドロマク』に描かれる。
- (9) シェークスピアの「ハムレット」の種話になった。
- (10) 『世界の文学』1, 31ページ。

参考文献

Daniel J. Walkowitz, Worker city, Company town, N. Y., Univ. of Illinois Press.
c. 1978.

John Erskin, The private life of Helen of Troy. London.

サトクリフ 『トロイアの黒い船団』 原書房 2000 年。